

平成22年度決算に基づく健全化判断比率等について

1 海老名市の健全化判断比率、資金不足比率

平成21年4月1日に全面施行された「地方公共団体の財政の健全化に関する法律（以下、「財政健全化法」と略します。）」の規定により「財政の健全性」を判断するため、平成22年度決算に基づく健全化判断比率（実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率及び将来負担比率の4指標）と公営企業の資金不足比率を算定いたしました。

算定の結果、**いずれの比率も国が定めた早期健全化基準を大きく下回っており、本市の財政の健全性は、財政健全化法上も問題ないこととなりました。**

【 健全化判断比率 】

	健全化判断比率	早期健全化基準
実質赤字比率	— (赤字はありません)	12.32 %
連結実質赤字比率	— (赤字はありません)	17.32 %
実質公債費比率	1.5 %	25.0 %
将来負担比率	— (算定されません)	350.0 %

【 資金不足比率 】

公営企業会計名	資金不足比率	経営健全化基準
下水道事業特別会計	— (資金不足はありません)	20.0 %

■ 各比率の概要 （本市の特別会計の設置状況等に即して、表記しています。）

- ・実質赤字比率：一般会計の実質的な赤字の程度を比率化したもの
- ・連結実質赤字比率：一般会計及び5特別会計の赤字、黒字を合算した、会計全体の実質的な赤字の程度を比率化したもの
- ・実質公債費比率：一般会計が負担する公債費及び公債費に準じた経費の程度を比率化したもの
- ・将来負担比率：一般会計が将来負担すべき実質的な負債（市債残高のほか、退職手当支給予定額、高座清掃施設組合等の地方債残高）の程度を比率化したもの
- ・資金不足比率：公営企業である下水道事業特別会計の資金不足額の程度を比率化したもの

2 財政健全化法の概要

自治体財政の健全性を確保するための従来の仕組みは、破綻した自治体財政の再建を国の関与によって促進する制度が地方財政再建促進特別措置法（昭和30年制定、以下「再建法」と略します。）に定められていました。

この再建法による制度は、制定後50年を経過し、次のような課題が指摘されるようになりました。

- ①再建団体の基準しかなく、早期に是正を促す機能がない。
- ②基準として使用する指標は、実質収支（フロー）の赤字の比率のみであり、地方債残高など負債（ストック）の状況に課題があっても、制度の対象にならない。
- ③主として普通会計（本市の場合、一般会計に相当します。）の状況のみが対象であり、公社、第三セクターなどとの関連が考慮されていない。

これらの課題を踏まえ、平成19年に制定された財政健全化法の特徴は次のとおりです。

- ①悪化した財政状況を早期に健全化するため、「早期健全化基準」と「財政再生基準」を設ける。
- ②実質収支（フロー）の指標だけでなく、負債等（ストック）の指標を導入する。
- ③普通会計だけでなく、公社、第三セクターなども含めた、連結ベースで自治体全体の財政状況を把握する。
- ④財政指標の整備と情報開示を徹底するため、監査委員の審査に付し、議会に報告するとともに公表する。

財政健全化法の制定により、自治体全体の将来負担を含めた財政状況を把握し、指標を公表することで、財政破綻する前に自主的な改善努力による財政健全化を図ることが制度化されました。

3 早期健全化基準と財政再生基準

(1) 早期健全化基準

健全化判断比率（実質赤字比率などの4指標）、公営企業の資金不足比率のいずれかが国の定めた「早期健全化基準」（公営企業については「経営健全化基準」）以上になった場合は、自主的な改善努力による財政健全化を図るために「財政健全化計画」（公営企業については「経営健全化計画」）の策定、実施が義務付けられます。

この計画については、①議会の議決を得た上で策定、②公表及び県への報告、③その実施状況の議会への報告、公表、県への報告などの手続きを行うこととされています。

(2) 財政再生基準

実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率のいずれかが国の定めた「財政再生基準」以上になった場合は、自主的な財政健全化は困難とみなされ、国等の関与による確実な財政再生を図るために「財政再生計画」の策定、実施が義務付けられます。

この計画の策定、実施に必要な手続きは上記（1）とほぼ同様ですが、一定の国の関与や地方債の起債制限等の措置が講じられます。

【財政再生基準】

	実質赤字比率	連結実質赤字比率	実質公債費比率
財政再生基準	20.00 %	40.00 %	35.0 %

4 健全化判断比率等の算定式の概要と海老名市の算定値

算定式は、本市の特別会計の設置状況等に即して、概要を表記しています。

I 実質赤字比率

(1) 算定式の概要

$$\text{実質赤字比率} = \frac{\text{一般会計の実質赤字額}}{\text{標準財政規模}}$$

- 実質赤字額：歳入不足のため、翌年度歳入を繰り上げて充用した額等
- 標準財政規模：当該団体の通常歳入される標準的な一般財源の規模
(主なものは一般財源となる市税、地方譲与税、利子割交付金等の交付金)

(2) 海老名市の算定値

$$\text{— (実質赤字比率)} = \frac{\text{— (一般会計の実質赤字額)}}{219 \text{ 億 } 2,057 \text{ 万 } 9 \text{ 千円 (標準財政規模)}}$$

- 一般会計の実質赤字額はありません。この場合、実質赤字比率は「—」と表記します。

II 連結実質赤字比率

(1) 算定式の概要

$$\text{連結実質赤字比率} = \frac{\text{連結実質赤字額}}{\text{標準財政規模}}$$

- 連結実質赤字額：①+②の合計額
 - ① 一般会計及び4特別会計（国民健康保険事業、老人保健医療事業、介護保険事業、後期高齢者医療事業）の実質赤字額の合計
 - ② 公営企業である下水道事業特別会計の資金不足額

(2) 海老名市の算定値

$$\text{— (連結実質赤字比率)} = \frac{\text{— (連結実質赤字額)}}{219 \text{ 億 } 2,057 \text{ 万 } 9 \text{ 千円 (標準財政規模)}}$$

- 全ての会計において実質赤字額はありません。この場合、連結実質赤字比率は「—」と表記します。

Ⅲ 実質公債費比率

(1) 算定式の概要

$$\text{実質公債費比率} = \frac{(\text{①元利償還金} + \text{②準元利償還金}) - (\text{③特定財源} + \text{④元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{(\text{⑤標準財政規模} - \text{④元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$$

(3カ年平均)

- ① 元利償還金：一般会計で借り入れた地方債の元利償還金
- ② 準元利償還金：ア～オの合計額
 - ア 満期一括償還地方債の1年当たりの元金償還相当額（本市では「海老名みのり債」が該当します）
 - イ 下水道事業債等の償還財源に充てた、一般会計の繰出金
 - ウ 一部事務組合が借り入れた地方債の償還財源に充てた、組合への負担金（本市では広域大和斎場組合、高座清掃施設組合が該当します）
 - エ 公債費に準ずる債務負担行為に基づく支出額（本市では該当なし）
 - オ 一時借入金の利子（本市では該当なし）
- ③ 特定財源：元利償還金及び準元利償還金に充てた特定財源（本市における主なものは、都市計画事業のために借り入れた地方債の償還に充てた都市計画税です。）
- ④ 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額：普通交付税の算定上、基準財政需要額に算入される元利償還金及び準元利償還金

（基準財政需要額とは、自治体の人口、面積等に応じて必要と認められる標準的な事務事業に要する歳出の額を、国の算出基準に従って算定した額です。）

(2) 海老名市の算定値

$$0.80286 = \frac{(\text{①} \quad 24 \text{億} 1,851 \text{万} 9 \text{千円} \quad + \quad \text{②} \quad 2 \text{億} 5,490 \text{万} 3 \text{千円}) - (\text{③} \quad 4 \text{億} 1,645 \text{万} 1 \text{千円} \quad + \quad \text{④} \quad 20 \text{億} 9,782 \text{万} 2 \text{千円})}{(\text{⑤} \quad 219 \text{億} 2,057 \text{万} 9 \text{千円} \quad - \quad \text{④} \quad 20 \text{億} 9,782 \text{万} 2 \text{千円})}$$

(実質公債費比率)
(平成22年単年度)

- 実質公債費比率は、平成20年度～平成22年度の3カ年平均で算定します。
- 上記の算定値は、平成22年単年度の算定値で、3カ年平均では「1.5%」となります。
- ※ **実質公債費比率の算定値の詳細は、次頁を参照してください。**

(3) 実質公債費比率の内訳

(単位 千円)

算 定 の 内 訳	平成20年度	平成21年度	平成22年度
分 子 (① + ②) - (③ + ④)	482,852	386,559	159,149
① 元 利 償 還 金	2,701,732	2,563,733	2,418,519
② 準 元 利 償 還 金 ア~オの合計	339,902	353,216	254,903
ア 満期一括償還地方債の1年当たりの元金償還相当額	10,000	26,667	43,333
イ 下水道事業債等の償還財源に充てた、一般会計の繰出金	225,395	196,132	123,042
ウ 一部事務組合が借り入れた地方債の償還財源に充てた、 組合への負担金	104,507	130,417	88,528
広域大和斎場組合	30,687	27,889	4,367
高座清掃施設組合	73,820	102,528	84,161
エ 公債費に準ずる債務負担行為に基づく支出額	0	0	0
オ 一時借入金の利子	0	0	0
③ 特 定 財 源	474,669	416,062	416,451
④ 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額 算入額	2,084,113	2,114,328	2,097,822
分 母 ⑤ - ④	23,092,384	21,878,287	19,822,757
⑤ 標準財政規模	25,176,497	23,992,615	21,920,579
④ 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額 算入額	2,084,113	2,114,328	2,097,822
実質公債費比率 $\frac{(\text{①} + \text{②}) - (\text{③} + \text{④})}{\text{⑤} - \text{④}}$	2.09096	1.76686	0.80286

平成22年度実質公債費比率(3ヵ年平均)

1.5

IV 将来負担比率

(1) 算定式の概要

$$\text{将来負担比率} = \frac{\text{① 将来負担額} - \text{② 充当可能財源等}}{\text{③標準財政規模} - \text{④元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額}}$$

① 将来負担額：ア～クの合計額

- ア 一般会計の地方債現在高
- イ 債務負担行為に基づく支出予定額（本市では該当なし）
- ウ 下水道事業債の元金償還に充てる、一般会計の繰出金の見込額
- エ 一部事務組合が借り入れた地方債の元金償還に充てる、組合への負担金の見込額
- オ 退職手当支給予定額に対する一般会計の負担見込額（全職員が平成 22 年度末に退職すると仮定した場合の、一般会計の負担見込額）
- カ 設立法人の負債などに対する一般会計の負担見込額（本市では該当なし）
- キ 連結実質赤字額（本市では該当なし）
- ク 一部事務組合の連結実質赤字相当額のうち一般会計の負担見込額（本市では該当なし）

② 充当可能財源等：ケ～サの合計額

- ケ 充当可能基金額：将来負担額に計上された地方債の償還などに充てることができる基金の現在高（本市の全基金が対象となります。）
- コ 充当可能特定歳入見込額：将来負担額に計上された地方債の償還などに充てることができる特定財源の見込額（本市における主なものは、都市計画事業のために借り入れた地方債の償還に充てることができる都市計画税です。）
- サ 地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額：今後、普通交付税の算定上、基準財政需要額に算入される元利償還金及び準元利償還金の見込額（交付税措置が見込まれる額）

(2) 海老名市の算定値

$$\text{将来負担比率} = \frac{\text{① 303 億 2,323 万 6 千円} - \text{② 359 億 7,473 万 2 千円}}{\text{③ 219 億 2,057 万 9 千円} - \text{④ 20 億 9,782 万 2 千円}}$$

- 将来負担比率：②充当可能財源等が①将来負担額を上回るため、将来負担比率は算定されません。この場合、「—」と表記します。

※将来負担比率の算定の詳細は、次頁を参照してください。

■将来負担比率の算定の留意点

本市では、将来負担比率が算定されませんでした。将来負担が全くないわけではありません。総務省が示した将来負担比率の算定式では、「①将来負担額」から「交付税措置が見込まれる額（上記②-サ）」を差し引くことにより、算定上「将来負担額」は減額されます。

しかし、「交付税措置が見込まれる額」は、普通交付税の算定上、算入が見込まれる金額であり、当該金額が普通交付税として交付されるわけではありません。したがって、当該金額全てが財源となるものではありません。

(3) 将来負担比率の内訳

(単位 千円)

算 定 の 内 訳	平成21年度	平成22年度	備考
分 子 ① - ②	-5,325,080	-5,651,496	
① 将来負担額 ア～クの合計	31,294,845	30,323,236	
ア 一般会計の地方債現在高	21,609,864	21,598,601	
イ 債務負担行為に基づく支出予定額	0	0	対象となる、債務負担行為はありません。
ウ 下水道事業債の元金償還に充てる、一般会計の繰出金の見込額	3,537,501	2,619,501	
エ 一部事務組合が借り入れた地方債の元金償還に充てる、組合への負担金の見込額	396,939	316,482	
広域大和斎場組合	18,402	14,585	
高座清掃施設組合	378,537	301,897	
オ 退職手当支給予定額に対する一般会計の負担見込額	5,750,541	5,788,652	
カ 設立法人の負債などに対する一般会計の負担見込額	0	0	土地開発公社は、休眠状態であり債務などはありません。
キ 連結実質赤字額	0	0	全ての会計で実質赤字額はありません。
ク 一部事務組合の連結実質赤字相当額のうち一般会計の負担見込額	0	0	加入している一部事務組合に赤字額はありません。
② 充当可能財源等 ケ～サの合計	36,619,925	35,974,732	
ケ 充当可能基金額	8,943,720	8,446,946	
財政調整基金	2,321,247	2,494,985	
奨学金基金	108,018	105,192	
国民健康保険財政調整基金	768,318	430,577	
まごころ基金	51,537	38,055	
環境基金	53,557	63,058	
介護保険給付費等準備基金	451,954	452,901	
市営住宅建設基金	535,991	537,015	
新まちづくり基金	4,532,355	4,124,029	
市債管理基金	120,743	201,134	
コ 充当可能特定歳入見込額	4,290,748	3,929,982	
うち都市計画税	4,287,868	3,928,664	
サ 地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額	23,385,457	23,597,804	
分 母 ③ - ④	21,878,287	19,822,757	
③ 標準財政規模	23,992,615	21,920,579	
④ 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額	2,114,328	2,097,822	
将来負担比率 $\frac{\text{①} - \text{②}}{\text{③} - \text{④}}$	—	—	②充当可能財源等が①将来負担額を上回るため、将来負担比率は算定されません。この場合、「—」と表記します。

※平成22年度の将来負担比率を算定する上で、平成21年度数値は用いませんが、経年比較を行うために表示しております。

V 資金不足比率

(1) 算定式の概要

$$\text{資金不足比率} = \frac{\text{資金不足額}}{\text{事業の規模}}$$

本市で対象となるのは、下水道事業特別会計です。

- 資金不足額：歳入不足のため、翌年度歳入を繰り上げて充用した額等
- 事業の規模：営業収益に相当する収入の額等

(2) 海老名市の算定値

$$\frac{\text{— (資金不足額)}}{\text{18億3,260万2千円 (事業の規模)}} = \text{(資金不足比率)}$$

- 資金不足額はありません。この場合、資金不足比率は「—」と表記します。